

幼児の遊びにみられる

学びの芽

子どもたちは新たなことに合うたび、
「ワクワク」「ドキドキ」と期待に胸をふくらませ、
「あれ?」「なぜ?」「どうして?」と心を動かし頭脳をめぐらせ、
そして「ふうん」「へえ!」「やっぱり」と感激し、納得します。
このような子どもたちの心や頭脳の動きを受け止め、
感激に共感していくことが
学びの芽をはぐくんでいくのではないのでしょうか。

ベネッセ次世代育成研究所について

設立にあたって

日本では、少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、多様な価値観やニーズに対応し、個人や家族の生活視点を大切にしながら、子どもや家族が「よく生きる」ための調査研究をしています。

また、子育て世代、これから子どもをはぐくむ世代のそれぞれの視点に立ち、社会文化的・知的・物質的資産を次世代に伝える社会システムをどのように構想するのかといった視点から調査研究、提言をしています。それによって、子ども自身の成長と、子どもを取り巻く地域や世代を超えた関係性が強くなることに貢献することを目指します。

一生を通して人生のそれぞれのライフステージの「よく生きる」を支援し、次の世代、さらにその次の世代が未来に向かって進むべき道標を示すことができればと願い、学術的な調査研究と体系的な理念の構築、事業・社会への還元を目指して、ベネッセ次世代育成研究所を設立いたしました。

使命・領域・テーマ

調査・研究の使命

未来を担う子どもをはぐくむためには、子どもの育ちや出産・子育てをあたたく見守る社会を構築することが必要です。当研究所では、子どもの育ちと、男性にも女性にも子育てしやすい環境作りという視点を大切に、調査・研究に取り組んでいます。

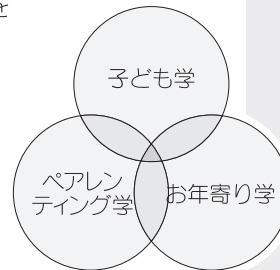
調査・研究の領域

調査・研究の成果を踏まえ、子育て・保育・教育・妊娠・出産・老年学などの分野の諸問題に提言や情報提供を行い、次世代の子どもたちの健やかな成長・発達を支援します。

調査・研究のテーマ

当研究所では、親と子ども、それを取り巻く人たちに焦点をあて、妊娠・出産、育児・保育・教育等について調査・研究に取り組んでいます。

- (1) 妊娠期～幼児期における子どもの成長・発達に関する学際的な研究
- (2) 親子関係・育児に関する基礎研究と実践プログラムの創出
- (3) 子どもを取り巻く社会環境に関する経年調査・長期的研究



発刊に寄せて

無藤 隆 先生 (白梅学園大学教授)

事例から何を読み取るか

1. 事例の活動から学びの可能性を読み取る

活動を計画し、実施する。そこで、子どもの学びはどのようなものとして現れるものなのか。何が可能性としてあるのか。そういったことを本書の事例から読み取ることができます。どの活動にも必ず教師の意図があります。ですが、注意してほしいのは、それはかなり臨機応変に変わるものだということです。予定通りの活動を子どもがするとは限りません。前の日に予定していても、当日思いがけず、別な活動が発展するかもしれません。天候だって変われば、外の活動も違うことになるでしょう。でもだからといって、意図なしで出たとこ勝負でよいとはならないのです。多様な変転の可能性に備え、いくつもの意図を用意しておき、成り行きに応じて、特定の意図の実現を進めていくのです。そこで実現しない意図はまた次の機会を作って可能にしていきます。

2. どの活動にもすべての領域が関わっている

どの活動を取っても、そこにたくさんの気づきの可能性があり、子どもの学びの展開があります。活動は常に総合的で多面的なものなのです。運動をしようとする、それは領域「健康」だけのことに限らず、「人間関係」も「言葉」も「環境」も「表現」も関係してきます。ですから、領域の保育内容の趣旨をいわば栄養成分のようにとらえてみましょう。実際の活動は料理です。料理は主に炭水化物とか主にタンパク質とかビタミンが豊富とかあるでしょうが、食べておいしく栄養のあるものは、多くの栄養分を多種類含んでいるものです。栄養剤ではなく、子どもに必要なのはおいしい料理なのです。

3. 活動を次の活動へとつなげて発達の道筋を描き出す

活動での学びを分析してみるとたくさんのごとがあります。ですが、それはその活動一つで確実に定着するものではありません。次の活動において確認され、発展していき、学びが発達の道筋として展開していくものなのです。そうやってこそ、本当の意味でも学びとして子どものものになっていきます。ですから、一つの活動を行ったら、そこで成り立ちそうな学びを幾種類も考え、その各々について、次に発展させていくべき活動を想定していくとよいのです。樹木が伸びて、たくさんの枝として広がっていくように、です。

4. 数週間単位で一通りの経験が出来ているかどうかをチェックする

子どもなりの活動を楽しみ、子どもなりの気づきがあり、学びが成り立ちます。そして子どもごとに学びの追求があり、発達の道筋が成立していきます。ですが、時に数週間単位で、保育内容を一通り経験しているかどうかを見てみましょう。あまりに経験が偏っていないかどうか。またそこに停滞していて、行き詰まっているかどうか。毎日満遍なくという必要はありませんが、ある程度の時間幅では経験の多様性を保証していきましょう。

5. 小学校の基盤とは

小学校教育につなげるとは、その前倒しではないことがわかって頂けると幸いです。本書にあるような豊かな活動の中でたくさんの学びをして、それが筋をなしていけば、自ずと小学校の教育の最も大事な基盤が作られるのです。



目次



はじめに



本書作成の趣旨・本書の特色……………	P 5
本書の活用にあたって……………	P 6～
学びの芽生えがはぐくまれていくためには……………	P 8～
幼児自身にかかわって	
周囲の環境や人にかかわって	



4歳児の遊びにみられる学びの芽



事例目次……………	P 10
事例紹介……………	P 11～



5歳児の遊びにみられる学びの芽



事例目次……………	P 28
事例紹介……………	P 29～

(巻末) 幼児の体験と幼稚園教育要領の内容とのつながり

